

川崎のグループ 燃料電池3輪車で

1400キロ 走破挑む

循環型エネルギー利用を目指すと、企業経営者やサラーマンらでつくる任意グループ「グリーン・エナジー・アドベンチャー」(番健司代表、川崎市多摩区)が六月、小型燃料電池を積んだ三輪自転車、アイスランド一周千四百キロの旅に出掛ける。アイスランドは豊富な水力、地熱を利用した水素燃料社会を目指しており、環境負荷の少ない燃料電池を使って同国を走ることで、クリーンなエネルギーをアピールする狙いだ。(石本 健二)

燃料電池は、水素と酸 造する小型燃料電池。縦 アドベンチャーでは、この素を反応させて電気を発 横十七・十八センチ、高さの車体を、八王子市の改装会社コスモウエーブに接し二十四センチ、二百(今井雅晴社長)に運び、自動車や家庭での実用化 燃料電池と高性能バッテリーを充電する。車体は前後二輪、後ろ一輪で、長さ二

今回利用するのは、大・二径、幅一・二径の一回メタル工業(名古屋市中)人乗り。グリーン・エナジーが研究機関向けなどに製



「ハイドロパフィン」の改装をするコスモウエーブの今井社長。手に持っているのが燃料電池

環境先進国アイスランド1周

循環型エネルギーPR

リーのリチウムイオン電池を載せた燃料電池三輪車に改装中。ヨーロッパにすむ海鳥パフィンにちなみ「ハイドロパフィン」と名付け、車体先端にパフィンのくちばしのデザインを取り入れた。

燃料電池車実用化のハードルの一つは、水素の搭載方法。今回は、特殊な合金に水素を蓄える水素吸蔵合金のボンベ(直径約四センチ、長さ約四十センチ)四本を座席下に搭載する。四本で約八時間走行できる見通しだ。

今井社長にとっても燃料電池を扱うのは初めて。水素を取り出す際に起きるボンベの温度低下、発電に必要な空気を十分に取り入れる工夫など、試行錯誤を重ねている。

番場さんは環境関連商品などを輸入販売するテラリウム社社長。これまで、米国でソーラー飛行機開発に携わったり、冒険家大場満郎さんの率いた「北極圏を目指す冒険ウォーク2000」に参加するなどしている。

「アイスランドはエネルギーの72%を水力や地熱発電のクリーンエネルギー

テイラウんじ



「人任せや言いっ放しでなく、われわれが

まちづくりの一端を担い、改革を提言していく」。そう語るのは、今年一月に横浜青年会議所(JC)理事長に就任した黒川勝氏(39)。

ギーで賄っている。燃料電池の技術はまだ不安定なものだが、アイスランドのツアーを通じて燃料電池とは何か、水素とは何かを発信したい」と話す。KDDIが通信機、松下電器産業がパソコンを提供するなど企業協賛もあるが、総費用約二千万円はメンバーの自腹だ。

六月四日に日本を出発。十一日に首都レイキヤビクをスタートし、番場さんら三人が交代でドライバーを務め、十五日間かけて千四百キロを走り、レイキヤビクに戻る。この間、横浜市立太田小学校と衛星回線結び、同校放課後キッズクラブの児童から燃料電池についての質問を受けるなど、子供たちに次世代エネルギーの大切さを伝えることにしている。